

「イエシュアがキリストである」

ことは奥義中の奥義

ベレーシート

●前回のメッセージは「1st セレブレイト・マツオート」の総括的な話をしましたが、今回のメッセージもそれに引き続いたものとなります。私の中ではマツオートの祭りは続いています。さて、私たちは「イエス・キリスト」という呼び名を、あたかも「名前と苗字」の感覚で使っているのではないのでしょうか、しかしそれは違います。「イエスはキリストである」というのは、「イエシュアがキリスト(メシア)である」という信仰の告白を意味しています。クリスチャンの多くは「イエシュアが自分の救い主」だとは理解していますが、「イエシュアがメシアであること」、あるいは「イエシュアがハツマーシーアツハとなられたこと」を正しく理解している人は少ないのではないかと思います。実はそのことが奥義中の奥義なのです。そこで、今回もそのことについて繰り返し語りたいと思います。

●人の子であるイエシュアが、自分のことをどのように呼んでいるかを弟子たちに聞いた時に、ペテロは「あなたは生ける神の子キリスト」と答えました(マタイ 16:16)。するとイエシュアは、「あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です」と言われました。「血肉ではなく」とは、「人間ではなく」という意味です。ではだれがそのことを明らかにしたのかといえば、「わたしの父」だと言われました。「あなたは生ける神の御子キリスト」だと悟ることは、奥義中の奥義なのです。

スー	エイ	ホ	クリストス	ホ	ヒュイオス	トゥー	セウー	トゥー	ゾントス
Σὺ	εἶ	ὁ	Χριστὸς	ὁ	υἱὸς	τοῦ	θεοῦ	τοῦ	ζῶντος.
あなたは	～です		キリスト		御子		神の		生ける

●「生ける・神の・御子」にそれぞれ冠詞がついていますし、「キリスト」にも冠詞がついて「ホ・クリストス」(ὁ Χριστὸς)となっています。ヘブル語で冠詞付きの「メシア」、「ハツマーシーアツハ」(מָשִׁיחַ)となります。ところでイエシュアはいつメシアとなられたのでしょうか。イエシュアがメシアとなられたことが、それを信じる私たちにとってどのようなことを意味するのでしょうか。それを再度、整理してみたいと思います。

●イエシュアは弟子たちに「ご自分がキリストであることをだれにも言ってはならない」と命じられました。これを「メシアの秘密」と言ったりもしますが、秘密にする理由は、ある時が来るまでだれもそのことを正しく理解できないからです。イエシュアはそのときから「ご自分がエルサレムに行って、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならないことを、弟子たちに示

し始められた」とあります。すると、「あなたは生ける神の子キリストです」と告白したペテロがすぐさまそれに反応して、「主よ、とんでもないことです。そんなことがあなたに起こるはずがありません」と口出ししています。このことによって、イエシュアがキリスト(メシア)となられることの意味を、ペテロが全く分かっていなかったことが如実に表されています。彼の背後にサタンが働いて、そのような口出しをさせたことが「下がれ、サタン。あなたは、わたしをつまずかせるものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている」とイエシュアが語っていることで分かります。このようにイエシュアがメシアである(=メシアとなる)ということとは奥義であり、つまずきなのです。事実、イエシュアの十字架の死を目撃したエマオの二人の弟子たちが失望して、自分たちの村に帰って行く道中で復活のイエシュアと会います。彼らはイエシュアであることに気づきませんでした。イエシュアは彼らに語りかけます。その会話のやりとりを見てみましょう。

1. 「苦難の後に、栄光を受けられた」メシア

【新改訳 2017】ルカの福音書 24 章 21～27 節

21 私たちは、この方こそイスラエルを解放する方だ、と望みをかけていました。

実際、そればかりではありません。そのことがあってから三日目になりますが、

22 仲間の女たちの何人かが、私たちを驚かせました。彼女たちは朝早く墓に行きましたが、

23 イエス様のからだが見当たらず、戻って来ました。そして、自分たちは御使いたちの幻を見た、
彼らはイエス様が生きておられると告げた、と言うのです。

24 それで、仲間の何人かが墓に行ってみたのですが、まさしく彼女たちの言ったとおりで、
あの方は見当たりませんでした。」

25 そこでイエスは彼らに言われた。

「ああ、愚かな者たち。心が鈍くて、預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち。

26 **キリストは必ずそのような苦しみを受け、それから、その栄光に入るはずだったではありませんか。」**

27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。

●イエシュアが彼らに「モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた」とあります。ここでの聖書全体とは「タナフ(תנ"ך)のすべて」です。タナフ全体にイエシュアがメシアとなれることが書き記されることを、イエシュアご自身が説き明かされたということです。「説き明かされた」はギリシア語「デエルメーニューオー」(διερμήνευω)の未完了形で、次々と説き明かし続けられたことを意味します。弟子たちはこれを聞いていたとき、彼らの心は「内で燃えていた」と記されています。ルカは「私たちの心は内で燃えていたではないか」の「心」を「カルディア」(καρδία)としていますが、45 節では数々の聖書を悟ることができるように、イエシュアは弟子たちの「心」を「ヌース」(νοῦς)として切り開いたことを記しています。

【新改訳 2017】ルカの福音書 24 章 44～49 節

44 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことはこう
です。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

45 それからイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて、

46 こう言われた。

「次のように書いてあります。『キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、

47 その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる。』エルサレムから
開始して、

48 あなたがたは、これらのことの証人となります。

49 見よ。わたしは、わたしの父が約束されたものをあなたがたに送ります。あなたがたは、いと高き所から力を着せられるまでは、都にとどまっていなさい。」

●これらから、45節のイエシュアの「聖書を悟らせるために彼らの心を開いて」の「心」とは、聖霊によって新しくされた「心」(知性)を意味していることが分かります。ここでの「心」は「ヌース」(νοῦς)で、福音書で初めて使われています。しかも一回限りです(26回中23回はパウロが、そして後の2回はヨハネが黙示録で使っています)。これはヨハネの福音書20章20節で、イエシュアに息を吹きかけられ「聖霊を受けよ」と言われた弟子たちと同様のことが起こっているのです。つまり人の霊の中に聖霊が働いて聖書を悟ることを意味しています。イエシュアが復活して40日間、いろいろな弟子たちに現れては御国の福音を再度語りました。おそらく弟子たちは聖霊による霊の感動をもって御国のことを理解したと思われる。このときの聖霊の満ちしを「プレーロー」(πλήρω)と言います。ヨハネ20章22節のルカ版がこの箇所(24:45)と言えます。

●イエシュアがエマオの村の二人の弟子たちに語られたのは、メシアは「苦難の後に、栄光を受ける」ということです。これが神の定めであり、苦難を受けないメシアは真のメシアではないということです。当時のユダヤ教は神のご計画を知らず、ユダヤ人たちには理解できないことであったのです。

【新改訳2017】箴 29:18

幻がなければ、民は好き勝手にふるまう。しかし、みおしえを守る者は幸いである。

●ここでの「幻」と訳された「ハーゾーン」(ἵζη)は神のご計画と同義です。神がいつもご覧になっている神のヴィジョンです。そのことに関心を持たない民は「好き勝手にふるまう」とは、「乱す、なおざりにする」という意味の「パーラ」(παρά)という語彙で、結果的に神の民としての歩みの的を外すことになってしまうということです。これはユダヤ教のみならず、キリスト教も同じです。反対に「みおしえを守る」とは、数々の戒めや規則を守るのではなく、神のトラーの中にも秘められた神のご計画をキリストという鍵を通して知り、歩むことを意味します。それが神に対する「愛」です。神と同じ思いを持つこと、神のご計画に共観をもって神とともに歩むこと、それが「みおしえを守る」ことなのです。神は霊です。ですから、私たちも霊によって共観・共感する必要があります。

2. メシアから与えられた聖なる注ぎの油

【新改訳 2017】 Iヨハネの手紙 2章 18

- 18 幼子たち、今は終わりの時です。反キリストが来るとあなたがたが聞いていたとおり、
今や多くの反キリストが現れています。それによって、今は終わりの時であると分かります。
- 19 彼らは私たちの中から出て行きましたが、もともと私たちの仲間ではなかったのです。
もし仲間であったなら、私たちのもとに、とどまっていたでしょう。
しかし、出て行ったのは、彼らがみな私たちの仲間ではなかったことが明らかにされるためだったのです。
- 20 あなたがたには聖なる方からの注ぎの油があるので、みな真理を知っています。
- 21 私がこのように書いてきたのは、あなたがたが真理を知らないからではなく、真理を知っているからです。
また、偽りはすべて、真理から出ていないからです。
- 22 偽り者とは、イエスがキリストであることを否定する者でなくてだれでしょう。
御父と御子を否定する者、それが反キリストです。
- 26 私はあなたがたを惑わす者たちについて、以上のことを書いてきました。
- 27 しかし、あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。
- 使徒ヨハネはここで教会を揺り動かす異なる教えに対して、あなたがたには「聖なる方からの注ぎの油」があることを心に留めるよう記しています。特に重要な箇所は 20 節と 27 節です。この「注ぎの油」を与える方こそ「メシア」=「ハムマーシーアツハ」(חַמָּוּשׁ אֲצִיחַ)です。「終わりの時」はイエシュアが来られた時から始まっています。ですから「今」は「終わりの時」です。と同時に、神に逆らう多くの反キリストも立ち上がってきています。それはキリスト教会の歴史の中で「パン種」を含んだ教えをもたらした「ストイケイア」で、今もなお存続しています。そうした流れの中にあっても、主に属する者(=主にとどまる者)には「聖なる方からの注ぎの油」「御子から受けた注ぎの油」が与えられ、真理に生きるようにされているのです。この「注ぎの油」のことを「油塗り」(回復訳)とも言います。この「聖なる油注ぎ」(油塗り)については、幕屋の中に詳しく記述されています。これは大切な知識として知るべきです。

【新改訳 2017】 出エジプト記 30 章 22~25 節

- 22 【主】はモーセにこう告げられた。
- 23 「あなたは最上の香料を取れ。液体の没薬を五百シエケル、香りの良いシナモンをその半分の二百五十シエケル、香りの良い菖蒲を二百五十シエケル、
- 24 桂枝を聖所のシエケルで五百シエケル、オリーブ油を一ヒン。
- 25 あなたは調香の技法を凝らしてこれらを調合し、聖なる注ぎの油を作る。これが聖なる注ぎの油となる。

●なぜ「聖なる注ぎの油」が必要のかと言えば、幕屋の中にあるすべての器材と祭司たちを聖別する(神の所有とする)ためです。それは「四つの香料」と「オリーブ油」によって指定通りに調合されたものです。つまり「調合された油」です。「油」は霊の象徴ですから、それは「調合された霊」とも言えますが、それはやがてイエシ

ユアがメシア(ハッマーシーアッハ)となつてから、つまり死んでよみがえられたイエシュアによって与えられることになる「いのちを与える御霊」(Iコリント 15:45)の型です。この「いのちを与える御霊」はイエシュアが復活する日までなかった霊なのです。このことをヨハネの福音書 7章で語っています。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 7章 37~39 節

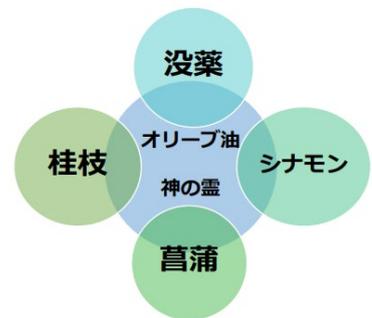
37 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。

「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。

38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

39 イエスは、ご自分を信じる者が受けることになる御霊について、こう言われたのである。

イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ下っていなかったのである。



●新改訳 2017 の 39 節の「まだ下っていなかった」を説明する脚注に、「まだなかった」とあります。どういことでしょうか。ギリシア語原文を見てみましょう。

ウーポー ガル ヘーン ブニューマ ホティ イエースス ウー
 ーデポー エドクスアセー

οὐπω γὰρ ἦν πνεῦμα, ὅτι Ἰησοῦς οὐδέπω ἐδοξάσθη.

まだ~ない なぜなら ~である 霊は ~ので イエシュア いまだ~ない 栄光を受ける

※ビザンチン・テキストでは、「霊」(πνεῦμα)の後ろに「聖」を意味する「ハギオス」(ἅγιος)があります。

●「なぜなら、イエシュアはいまだ栄光を受けていなかったので、聖霊はまだ存在していなかった」と読み取れます。「まだ下っていなかった」と訳すと、ペンテコステの時に下る聖霊のことだと解釈してしまいます。それは教理による訳であって、誤解をもたらします。イエシュアは復活したその日に「いのちを与える御霊」となっているのです。つまり弟子たちはイエシュアが復活したその日に聖霊に受け取っているのです。ペンテコステの聖霊の満たし(「ピンブレミ」πίμπλημι)とは異なります。その結果、イエシュアが言われることを理解するようになり、ルカ 24 章のエマオの弟子たちと同様に「心燃える経験」をしているのです。この聖霊を与えて下さる方こそメシア(Χριστός)なのです。エックレーシア(教会、召会、集会)はその方の声を聞き続けなくてはならないのです。「主は御霊です」(IIコリント 3:17)。主の声とは御霊の声です。それは「パン種」の入った教え(ストイケイア)を見抜いて、純粋なパンで主を礼拝することができるのです。このことを私たちは信じなければなりません。

●このことを裏付ける「聖なる注ぎの油」の成分の中に、**死と復活を象徴する四つの香料が調合されています。**

- ①「液体の没薬を五百シエケル」
- ②「香りの良いシナモンをその半分の二百五十シエケル」
- ③「香りの良い菖蒲を二百五十シエケル」
- ④「桂枝を聖所のシエケルで五百シエケル」

●「没薬」はキリストの死を象徴します。「シナモン」はその死を増強します。

「菖蒲」は沼地にまっすぐに生えるものでキリストの復活を象徴します。

「桂枝」はその復活の力を増強します。つまり聖なる注ぎの油には「死と復活」の霊が含まれているのです。



●香料の割合も重要です。香料の最初と最後にある「没薬」と「桂枝」は同量の五百シェケルですが、中間の二つの香料である「シナモン」と「菖蒲」がそれぞれ二百五十シェケルで、合わせると五百シェケルになります。これで五百シェケルが三つあることになります。これは三一の神を象徴し、真ん中の半分は「死」、もう半分は「復活」を表しています。これらを含む霊こそ神にとって実に「甘い事柄」なのです。

●その油が注がれる(塗られる)ことは、キリストの死と復活の霊に満たされることになるだけでなく、その力に与ることにもなるのです。この「聖なる注ぎの油」を与えるために、イエシュアの受肉から復活・昇天・着座までの一連の贖いの出来事が意味する「聖なる香」が、まず神に献げられなければなりません。その「聖なる香」についても、幕屋の中に記述されています。

【新改訳 2017】出エジプト記 30 章 34～35 節

34 【主】はモーセに言われた。「あなたは香料のナタフ香、シエヘレテ香、ヘルベナ香と純粋な乳香を取れ。これらは、それぞれ同じ量でなければならない。

35 これをもって、調香の技法を凝らして調合された、塩気のある、きよい、聖なる香を作れ。

●ここに大祭司が献げる「聖なる香」があります。この香は私たちのためではなく、神のためのものです。これは御子イエシュアが大祭司として神に献げる香を意味しています。この香が献げられることで、初めて「聖なる注ぎの油」が効力をもつのです。

①「ナタフ香」は没薬のことで、②「シエヘレテ香」と③「ヘルベナ香」とともにイエシュアの尊い死を象徴します。そして④「乳香」だけがイエシュアの復活を象徴しています。

●このように、「聖なる注ぎの油」だけでなく、「聖なる香」の四つの成分も、同じく「キリストの死と復活」を表しています。ただし「聖なる香」の四つの成分には、「聖なる注ぎの油」の成分に見られたような量についての記載は何もありません。むしろ四つの成分に「塩」が加えられることが特徴的です。その「塩」とはキリストの死と復活の不変性と奥義性を表しています。この香は物や人ではなく、神が享受するものです。この「キリストの死と復活」を表している「聖なる注ぎの油」と「聖なる香」こそが、「甘い香り」(キリストの香り)なのです。私たちはこの甘い香りを放つべく、神によって選ばれ、聖別されているのです。

●「聖なる香」が今や神の御子イエシュアによって神に対して包括的に献げられているために、イエシュアをメシアとして信じる者に「聖なる注ぎの油」が塗られているのです。塗られることで、神を知ることができる

ようになるのです。パウロは、心の目が開かれて、「神の召しによって与えられる**望み**」がどのようなものか、「聖徒たちが**受け継ぐもの**」がどれほど栄光に富んだものか、「神を信じる者に働く**力**」がどれほど偉大なものであるかを知ることができるようにと祈っています(エペソ 1:18~19)。ここでの「望み」「受け継ぐの」「力」は**すべてキリストのこと**を指しています。もし私たちに「聖なる注ぎの油」が塗られることがないとしたら、それを知ることは決してありません。この「聖なる注ぎの油」が私たちの霊に塗られていることを忘れてはなりません。

●私たちの「霊」に「聖なる注ぎの油」が塗られていますが、それによって「たましい」や「からだ」が犯す罪を根絶できるわけではありません。私たちが救われると罪が根絶されるわけではないということです。再生しているのは私たちの霊だけです。しかしながら、教会が携挙されるときには、私たちのからだは一瞬にして霊のからだに変えられます。ですからメシア王国において私たちは罪に支配されることはあり得ません。

3. イスラエルに与えられる「聖なる注ぎの油」とは「恵みと嘆願の霊」

●教会はすでに「聖なる注ぎの油」が与えられていますが、イスラエルの民に対する神の取り扱いはこれからです。神はイスラエルの民に対して「後の雨」(=春の雨、収穫をもたらす雨。「マルコーシュ」 מְקוֹשֵׁת)である「**恵みと嘆願の霊**」を与えることで、一瞬にして彼らの霊を回復させます。その預言がゼカリヤ書 12 章にあります。

【新改訳 2017】ゼカリヤ書 12 章 1~11 節

1 宣告。イスラエルについての【主】のことば。

天を張り、地の基を定め、**人の霊をそのうちに造られた方**、【主】の告げられたことば。

2 「**見よ**。わたしはエルサレムを、その周りのあらゆる民をよろめかせる杯とする。

エルサレムが包囲される時、ユダについてもそうなる。

3 **その日**、わたしはエルサレムを、どの民にとっても重い石とする。

すべてそれを担ぐ者は、身にひどい傷を受ける。地のすべての国々は、それに向かって集まって来る。

4 **その日**——【主】のことば——わたしはすべての馬を打って驚かし、その乗り手を狂わせる。

しかし、わたしはユダの家の上に目を見開き、もろもろの民のすべての馬を打ってその目を見えなくする。

5 ユダの首長たちは心の中で言う。『エルサレムの住民は、彼らの神、万軍の【主】によって私の力となる。』

6 **その日**、わたしはユダの首長たちを、薪の中にある火鉢のようにし、麦束の中にある燃えるたいまつのようにする。彼らは右も左も、周りにいるどの民も焼き尽くす。しかしエルサレムはなお、元の場所エルサレムに残る。

7 【主】は最初にユダの天幕を救う。ダビデの家の栄えと、エルサレムの住民の栄えが、ユダ以上に大きくなるようにするためである。

8 **その日**、【主】はエルサレムの住民をかくまう。**その日**、彼らの中よろめき倒れる者もダビデのようになり、ダビデの家は神のようになって、彼らの先頭に立つ【主】の使いのようになる。

9 **その日**、わたしはエルサレムに攻めて来るすべての国々を根絶やしにしよう。

10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、**恵みと嘆願の霊を注ぐ**。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って**激しく泣く**かのように、その者のために激しく泣く。

11 **その日**、エルサレムでの嘆きは、メギドの平地のハダド・リンモンのための嘆きのように大きくなる。

● 預言書で「**見よ**」（「ヒンネー」 הִנֵּן）とか、「**その日(に)**」（「ヴァヨーム・ハフー」 בַּיּוֹם הַהוּא）という語彙がある時は、それはメシア王国が最も近づいたことを指します。つまり神のご計画の行き着く先を預言者たちは見せられて語っているのです。その最大のトピックは、エルサレムを包囲するために、「獣」と呼ばれる反キリストが世界中から軍隊をハルマゲドンに集めて、エルサレムとそこにいる住民に押し寄せます。しかし神はエルサレムの住民をかくまいます。そして神が「**ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ**」のです。「激しく泣く」は「マールル」（מָרַר）で、かつてペテロがイエシュアを三度裏切った後に、主のことばを思い出して、「激しく泣いた」こととつながります(マタイ 26:75)。ペテロの行為がまさにイスラエルの終わりの日の悔い改めを預言的に示しています。

● 「イスラエルの残りの者」が産み出されるために、「聖なる注ぎの油」が主によって彼らの霊の中に塗られるのです。イスラエルの残りの者(=「イスラエルの民族的救いとも表現されます」)が、「未曾有の苦難」を通して産み出されるのです。それは教会になされた以上に劇的な出来事と言えます。そしてメシア王国においては、人の霊が開花されて喜びの世界が訪れます。またイスラエルの民の数も爆発的に増し加わるようになります。しかし彼らは携挙された教会のように「朽ちないからだ(霊のからだ)」になっておらず、御国に入っても罪を犯す可能性はあるのです。その意味では御国においても「先の者(イスラエル)が後になり、後の者(教会)が先になる」のです。「獣」と呼ばれる反キリストも偽預言者も火と硫黄の池に投げ込まれ、サタンも底知れぬ所に閉じ込められるため、罪の力の多くはとどめられるでしょうが、御国においても彼らの罪が根絶されることはないのです。からだは霊になって変えられなければ、罪を犯す可能性はあります。しかし霊の部分の完全に再生され、たましいもその影響を受けるので、その影響が霊の増長することは間違いありません。教会と同じく主が彼らの霊とともにいることが慰めとなるのです。つまり、「主があなたの霊とともにいてくださいますように。」とあるからです(Ⅱテモテ 4:22)。実は**これがすべて**なのです。この事実を知ること、そしてそれを経験すること、それが教会である私たちにとっても、イスラエルにとっても、すべてなのです。これは「奥義中の奥義」であり、「イエシュアがメシアである」という信仰告白の内実なのです。

ベアハリート

● 「イエシュアこそメシアである」ことは奥義中の奥義です。ここでは語れなかったことがまだまだあります。「シエーム・イエシュア」と呼びつつ、この恵みをより深く尋ね求めて行きたいものです。そうするなら、私たちはキリストを待ち望む最強の花嫁となることでしょう。

三一の神の霊が私たちの霊とともにあります。

2023.4.30